（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和７年度　海外派遣研究員研究報告書〔研究実績〕

令和　８年　３月　７日

日本大学理事長　　殿
日本大学学長　　殿

所　　属　　芸術学部（芸術研究所）
資格・氏名　　准教授・鳥海　早喜

令和７年度海外派遣研究員（長期）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　長期
２　研 究 課 題

日本とヨーロッパにおける日本初期写真に対する価値解釈の差異に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦２０２５年４月１７日～２０２６年１月３１日
４　派　遣　先　　○イギリス、フランス、フィンランド

５　研 究 目 的

本研究の目的は、日本で語られてきた写真史の偏りと問題点を考察すること、そして世界的な価値基準における日本初期写真の再評価について知見を得ることである。

一つ目に位置付けた目的は「これまで日本で語られてきた世界写真史は、どのような要素が重要視されてきたのか。一方で抜け落ちて語られてきた情報は何か。そして、そのようになった理由は何であったのか」を問うものである。研究者は日本で語られてきた写真史は、写真を独立した芸術表現領域として確立させることを目的に、その成り立ちを分かりやすく紹介する直線的な歴史形態であったと考えている。これにより写真史の理解が容易になる一方で、端的に示そうとしすぎるために排除される情報も多くあったといえる。また、芸術としての写真の立場を示すために表現の歴史を中心として構成されてきた傾向がある。表現の変化に合わせて時代を区切って直線的に紹介される写真史は、潮流はつかみやすいが、広告写真や営業写真館など商業的な要素が強い写真や家族写真など身近な写真が歴史に組み込まれず、写真の全体像が見えづらいといった問題点も抱えている。

研究者はこの問題に対する考察を深めるため、その一例として＜絵画的な肖像写真を

〔５　研究目的（つづき）〕

撮影したコンビ＞という彼らの一側面だけが、日本で語られる写真史のなかで定着しているデイビット・オクタウィウス・ヒル(David Octavius Hill,1802-1870) とロバート・アダムソン (Robert Adamson,1821-1848) (以後、ヒル＆アダムソンと略記)について、スコットランドを中心としたイギリスで調査考察を行い、日本で語られる写真史の偏りを詳らかにし、新たな写真史構築の可能性を探ることにした。研究者は2019年にもヒル＆アダムソンに関する日本国内の偏った評価について指摘しているが(「＜写真家ヒル＆アダムソン＞の歴史認識に対する問い」『写真の起原 英国』編集/東京都写真美術館 pp209-219 2019)、この時は日本国内での調査結果のみを踏まえた指摘であった。そのため、本研究ではスコットランドという彼らが生まれ育ち活動した土地での文献調査や作品調査、フィールドワークを通して、より深く分析・考察し、イギリス国内で発表された先行研究を調査することで、イギリスで語れる写真史に彼らがどのように組み込まれているかを詳らかにし、日本で語られる写真史の問題点を明確にすることを試み、その成果を論文発表することとした。以降、この目的に関する調査を調査Ａと記す。

研究目的の二点目は、ヨーロッパから新たな技術・文化として写真を需要することになった日本の初期写真が、世界写真史の母体となってきたヨーロッパでどのように受け止められているのかを調査することである。日本において初期写真は、撮影者の著名性、写された被写体の認知度などが評価基準となり、収集保存される傾向にあったといえる。これに対して、ヨーロッパではどのように解釈されているのかを探ることが本研究目的の問いである。この問いに対する調査を行うためにフランス国立ギメ東洋美術館（以後、ギメと略記）のデュボワコレクションを調査することとした。デュボワコレクションは、ギメが所蔵するジョゼフ・デュボワ(1943-2014)が1970年代から収集した、幕末から大正時代までに日本で制作された初期写真のコレクションである。主要な作品の形態は写真アルバムであり、写真点数は約19,000点に及ぶ。ギメでは、このコレクションを対象としたHikarIAプロジェクトが2023年11月から進行中である。このプロジェクトは、ギメと文化事業向けAIサービスの開発を専門とするTEKLIA社が提携して取り組むものである。すでに適切な保存処置、高解像度画像の複写データの作成、コレクションに適したAIモデルの選択と調整、AIを活用したデータベースの構築が完了しており、研究者が滞在した際は、プロトタイプのプラットフォームを公開しながら、主たるエンドユーザーである研究者にとって活用しやすいプラットフォームとするための精査を行っている段階であった。

プロジェクトに参加しながら調査することで、コレクションの全貌を把握するとともに、プロジェクトメンバーと意見交換を頻繁に行うことで、フランスにおいて日本初期写真がどのように解釈されているかを探ることとした。また、写真コレクションに対するAI活用の可能性についても学ぶ機会とするため視野を広げた柔軟な議論を心がけることとした。この研究目的については、知見を得ることを主たる目的として位置付けた上で、今後の研究発展を見据えた継続性が高いギメ研究者との関係構築も目的の一つとした。この目的に関する調査内容を調査Ｂと記す。

６　研　究　概　要

①研究の方法

＜調査Ａ＞

調査Ａは調査考察が目的である。そのための研究方法として以下を採用した。

Ⅰ.文献調査
Ⅱ.ヒル＆アダムソンの作品及び資料調査
Ⅲ.ヒル＆アダムソン活動地域のフィールドワーク
Ⅳ.ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットに関するフィールドワーク
Ⅴ.スコットランドとイングランドにおける写真史認識の差異に関する資料及び関連作品の閲覧調査

＜調査Ｂ＞

調査Ｂは知見を得ることが主たる目的である。そのため、以下の方法を採用した。

Ⅰ.デュボワコレクションの閲覧と詳細分析
Ⅱ.英語及びフランス語で執筆された日本の初期写真に関する文献調査
Ⅲ.ギメ学芸員との恒常的な意見交換
Ⅳ.HikarIAプロジェクトに関する研究者視点による情報の精査及び提言

いずれも詳細については以下の項目②に記す。

②渡航先での活動内容

渡航先として３つの国を挙げているが、主要渡航国はイギリス及びフランスである。フィンランドは往路移動時に航空会社のストライキによるフライトキャンセルに伴い急遽滞在することになった渡航先であり研究活動は行っていない。そのため、ここではイギリス及びフランスでの活動について報告する。

＜調査Ａ・イギリス＞

調査対象であるヒル＆アダムソンについて調査考察を行うため、彼らに関する資料を多く所蔵し、関連文献の所蔵も豊富であるセント・アンドリューズ大学に客員研究員として、約7ヶ月間の調査活動を行った。

Ⅰ.文献調査

日本ではスコットランド写真史及びヒル＆アダムソンに関する書籍を閲覧できる施設が非常に少ない。国立国会図書館にも増して保有数の多い日本大学芸術学部図書館でもスコットランド写真史に関する文献は8点のみである。比するまでもないが、セント・アンドリューズ大学図書館では、Scottish Photographyと検索すると書籍だけで412点、さらに論文や記事が245点も結果として表示され、その全てが閲覧可能である。研究者は、スコットランド写真史から調査をはじめ、ヒル＆アダムソンに関する書籍へ焦点を絞る順、並びに大著から論文や記事などの短いテキストという順序で文献調査を行なった。

また、スコットランド国立図書館では1800年代に発行された貴重文献を閲覧することができるため、閲覧申請の上、貴重文献の調査を行った。

Ⅱ.ヒル＆アダムソンの作品及び資料調査

〔６　研究概要（つづき）〕

セント・アンドリューズ大学、スコットランド国立図書館、スコットランド国立美術館（肖像部門）において閲覧申請を行い、ヒル＆アダムソンの写真プリント、ネガの閲覧調査を行った。また、スコットランド国立美術館ではヒル及び関連作家の絵画作品の閲覧調査を行った。

Ⅲ.ヒル＆アダムソン活動地域のフィールドワーク

セント・アンドリューズ及びエディンバラにおいてヒル＆アダムソンが撮影活動を行った地域のフィールドワークを行った。また、セント・アンドリューズでは彼らに深く関連するデイヴィッド・ブリュースター（David Brewster, 1781-1868）の住居周辺のフィールドワークも行った。セント・アンドリューズは、ごく初期における写真研究の中心的位置にあり、初期の写真技術によって撮影された数少ない都市でもある。加えて、街並は撮影から約200年を超える今も老朽化や塩害を超えて主要建造物がそのままに姿を残している。そのため、セント・アンドリューズではヒル＆アダムソンが、どのような位置から撮影を行っていたかを調査するフィールドワークが可能であった。

Ⅳ.ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットに関するフィールドワーク

イギリスにおける調査は、スコットランドを調査対象都市として計画書を提出したが、調査の必要性からロンドン及びレイコックでの調査を追加した。これは本項目と続く項目Ⅴの調査を行うためである。

ヒル＆アダムソンが活用した写真技術カロタイプの発明者であり、同時代に同じ写真技術を用いてスコットランドを撮影し、のちには彼らのロンドン進出の壁ともなったウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット(William Henry Fox Talbot, 1800-1877、以降タルボットと略記)について調査するため、彼の自邸及び活動拠点であるレイコックでもフィールドワークを行うことにした。タルボットの側から見たヒル＆アダムソンの存在とカロタイプに関する知識を深化させることが目的であった。

Ⅴ.スコットランドとイングランドにおける写真史認識の差異に関する資料及び関連作品の閲覧調査

本項目は項目Ⅳ同様に、調査都市として追加したロンドンでの活動である。日本で語られる写真史では、この地域の事柄について＜イギリス＞という広い括りでまとめられることが多い。しかし、現地調査を行うとスコットランドとイングランドでは文化や歴史的背景が大きく異なり、写真に関する歴史的出来事についても論じ方に大きく差異があることを痛感した。詳細は項目７に記すが、この点について知見を深めることを目的として、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館、ナショナルギャラリー、ナショナルポートレートギャラリー、テート・ブリテン、フォトグラファーズギャラリーなどにおいて閲覧調査を行った。

＜調査Ｂ・フランス＞

約３ヶ月の期間、客員研究員としてギメ・HikarIAプロジェクトに参加しながら本調査を行なうこととした。デュボワコレクション及びフランスにおける日本初期写真の

〔６　研究概要（つづき）〕

位置付けについて調査し、その実態を明らかにすることを主眼とした。

Ⅰ.デュボワコレクションの閲覧と詳細分析

デュボワコレクションの全体像を掴み、その傾向を分析するため、コレクションのうち閲覧が叶った実資料の閲覧調査と、コレクション全資料が複写されたデジタルデータの分析調査を行った。

Ⅱ.英語及びフランス語で執筆された日本の初期写真に関する文献調査

日本の初期写真が英語及びフランス語でどのように語られているかを調査することを目的としてギメ図書館、日仏会館フランス国立日本研究所図書館において日本初期写真に関する書籍の文献調査を行った。

Ⅲ.ギメ学芸員との恒常的な意見交換

フランスにおいて日本の初期写真がどのように認識されているかを知るため、ギメの写真コレクション学芸員であるエドワール・デサントゥールをはじめギメの学芸員と恒常的な意見交換を行った。

Ⅳ.HikarIA プロジェクトに関する研究者視点による情報の精査及び提言

HikarIA プロジェクトは日本語、フランス語、英語の三言語で活用可能なプラットフォームを構築しているが、デジタルイメージから AI が被写体を特定抽出し付与するタグは適切な言語変換が困難であり、日本の文化や歴史を理解した上での精査が必要であった。研究者はこれらのタグについて精査しながら、ギメ学芸員及び TEKLIA 社 CEO であるケルモーバン・クリストファーと意見交換し、日本の初期写真を理解することの難しさと改善点について議論を重ねた。他にも日本写真史の専門家としてプラットフォームの活用と問題点について提言も行った。

７　研究結果・成果

＜調査Ａ＞

調査Ａについては、以下に記す通り 2028 年までに 2 本の論文を発表することを想定しているため、本報告書では概要のみを記す。また、継続研究として令和 8 年度日本大学芸術学部個人研究も申請している。

調査Ａは、日本で語られてきた写真史の偏りや問題点を詳らかにするために、その一例としてヒル＆アダムソンについて考察するものであるが、研究者はこれまでの写真史において彼らの活動は、写真の黎明期である 1840 年代に美しく絵画的な肖像写真を撮影したコンビであるという部分のみが際立って取り上げられ、語られてきたと考えている。端的にまとめると以下のようになる。

ヒル＆アダムソンは、風景画家であるヒルがスコットランド自由教会設立に伴う巨大な集合肖像絵画の制作にあたり、大人数を描くための下絵として写真技術を活用するために共同することになった。パートナーに選ばれたアダムソンは、兄が写真の発明者たちのそばで働いていたことから、ごく初期の段階でカロタイプという写真の撮影・制作技術を身につけた人物であった。彼らは絵画の下絵のために写真制作を始めたが、写真そのものに価値を見出すようになり作品としても発表するようになった。

〔７　研究結果・成果（つづき）〕

その後、彼らは５年ほど制作を継続するが、アダムソンが若くして亡くなり、ヒルは写真から離れ画家としての生活に戻っていったという語り口である。そして、その後の歴史においては、ピクトリアリズムの流行に伴い注目されるようになり、1937 年にニューヨーク近代美術館で開催された展覧会「Photography 1839-1937」で、黎明期において絵画的な美しい肖像写真を制作したコンビとして歴史上の立ち位置が決定的となり、同展覧会の図録が世界各国の写真史の底本になることで、絵画的な肖像写真を撮影した写真家コンビとしての位置が確立された、というように紹介されてきたと捉えている。

しかし、彼らの活動は写真史において、肖像写真の分野だけではなく、風景写真やドキュメンタリー写真の起源や発展にも関わる価値があるものであった。詳細を記すことは控えるが、風景写真においては、いわゆる風景絵画から継続する表現は無論のこと、光による描写である写真技術だからこその抽象的な表現を試みてさえいた。彼らの作品におけるドキュメンター性については、これまでも日本語文献のなかで触れられることはあったが、概説的な写真史には適切に組み込まれきらずにいたと研究者は考えている。このような風景写真やドキュメンタリー写真に関する彼らの重要性を日本で語られる写真史に適切に加えることは、彼らの活動と立ち位置を再定義することにつながる。そして、この指摘は、写真史における彼らの先見性や影響を与える領域の広さをこれまでとは異なる立場に位置づけるものであり、延いては写真史全体の再構築のために一端を担うものになると考えている。この指摘については、2026 年度発表予定の論文で詳細を報告する。

また、本調査では彼らの作品の評価と他の表現との関係性についても考察を行った。これまで日本国内では前述のニューヨーク近代美術館における展覧会及び図録への掲載や、アルフレッド・スティーグリッツ(Alfred Stieglitz 1864-1946)が手掛けた写真雑誌『カメラワーク』に作品掲載されたことなどアメリカ写真界での評価の高まりを紹介するかたちで、彼らの作品評価を示す傾向にあった。つまり、「アメリカで高く評価された作品であるから素晴らしい」という紹介にとどまっていたわけである。

これに対して研究者は本調査のなかで、ウォルター・スコット(Sir Walter Scott 1771-1832)やロバート・バーンズ(Robert Burns 1759-1796)といったヒル＆アダムソンが影響を受けた表現者をはじめ、オランダ絵画やスコットランド肖像画との比較調査と考察を行った上で、彼らの作品について評価することが重要であると考えるに至った。特にウォルター・スコットが表現分野に与えた影響は大きく、英語論文における先行研究では、ヒル＆アダムソンの作品について、ウォルター・スコットの影響を強く感じるという一文のみで語られることもあるほどであった。しかしながら、日本国内では、ウォルター・スコットの文学はそれほど広く認識されておらず、ウォルター・スコットとヒル＆アダムソンの作品に関して詳細な分析がなされた日本語論文も未見である。この内容については調査を継続し、2028 年度に論文発表することを目指している。これにより。彼らの作品の本質的な魅力について再評価するとともに、写真の見方に関する一つの方法論を示唆したいと考えている。

〔７　研究結果・成果（つづき）〕

以上のように調査Aに関する成果を発表していくことは、彼らの歴史的位置付けを問うだけでなく、本研究の目的である日本で語られる写真史の歪さに対する問題提起にもなり得ると考えている。彼らの歴史的位置づけを見直すことによって、自ずとその先に続く歴史のかたちも見直す必要が出てくる。この見直しと再構築の継続が日本で語られる写真史のかたちを変えるものとなろうと研究者は考えている。

また、今後の研究テーマとして、日本で語られるイギリス写真史に対する細やかな分類整理と丁寧な紹介の必要性について問題意識を強くもつことができたことも一つの成果であった。日本国内では、この地域の歴史について、大きくイギリスと一括りにして語られることが多い。しかし、実際に現地調査を行うとイングランドとスコットランドでは文化的背景も、写真技術の発明当時の社会の在り方も異なっていたことが明白であった。調査対象であるヒル＆アダムソンについても、無論その影響はあり、特にウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットとの関係性を理解するためには深い理解が必要不可欠であった。この理解のためにイングランド（ロンドン及びレイコック）での調査も追加した。ヒル&アダムソンが活用した写真技術であるカロタイプを発明したタルボットは、イングランドではカロタイプの特許申請を出し制限をかけているが、スコットランドでは特許申請を行わなかった。これはヒル＆アダムソンがセント・アンドリューズ及びエディンバラで精力的に写真制作を行えた理由でもある一方で、この特許申請が、彼らのロンドン進出を阻む壁にもなった。また、イングランドとスコットランドでは彼らの語り方も異なる。例としてロンドンに位置するヴィクトリア・アンド・アルバート博物館には写真セクションがあるが、ヒル＆アダムソンには触れられていない。また、同じくイングランドに位置し、タルボットの活動拠点であったレイコックではヒル＆アダムソンとタルボットの直接的な関係性については示されず、ブリュースターに関連して「Brewster was instrumental in bringing the calotype process to the attention of Robert Adamson and also introduced the latter to DO Hill.」という短いテキストで触れられるのみであった。

他にもヒル＆アダムソンの助手としてジェシー・マン（Jessie Mann 1805-1867)という女性が存在していたことをはじめ、写真の黎明期における女性の存在など多くの新しい知見を得ることができた。これまで注目されてこなかった写真の制作を支えた女性たちに関する調査も継続していきたい。

＜調査Ｂ＞

調査Bにおける目的は「コレクションの蒐集者であるジョゼフ・デュボワが、日本の初期写真の何を魅力に感じ価値を見出していたのか。コレクション基準は何であったか」を探ることであった。これを知ることは、ヨーロッパから見た日本の初期写真の位置付けを考察することにつながると考えたためである。この問いに対して研究者は、ジョゼフ・デュボワのコレクション基準は、写真家や限定された被写体の写真にあったのではなく、幕末明治の美しい日本を集約した「写真アルバム」そのものにあ

〔７　研究結果・成果（つづき）〕

ったのではないかと推察するに至った。推察の理由は以下二点である。

一つ目として、写真家の著名性に対する興味関心の希薄さを挙げる。デュボワコレクションを外観すると、制作者としては日本写真の開祖として知られる上野彦馬や下岡蓮杖の写真もあるが、その中心は彼らや外国人写真家から写真を学んだ経験をもつ第二世代の写真家である鈴木真一や市田左右太、日下部金兵衛、そして、ライムント・フォン・シュティルフリートやフェリーチェ・ベアトなど外国人写真家たちであることが分かった。第一世代の写真家に対するこだわりの無さは、「日本写真の開祖」や「著名な写真師であること」など史学的価値に対する興味関心の薄さを示している。つまり、写真家の著名性をコレクションの基準にはしていないと見ることができるのである。史学的希少性に価値を見出していた場合、上野彦馬や下岡蓮杖の作品をもっと多く所有しようと試みたはずである。

二つ目としては、写真アルバムという形状の特性を挙げる。デュボワコレクションの多くは写真アルバムであり、収録されている写真は手彩色により着彩された写真である場合が多い。アルバムの装丁は花鳥風月や人力車など日本らしいデザインを螺鈿細工などで施した漆仕上げのものも多く、外国人が想像する当時の日本らしさを全面に押し出した美しい仕上げである。撮影対象は限定的ではなく、風景写真から肖像写真まで幅広く、撮影場所も日本各地の名所に及んでいる。そのコレクションからは、「この場所の写真だから」「この人が撮影した写真だから」という要素は感じられない。

上記２点を主な理由として、あくまで推察の域を出ないが、研究者は、ジョセフ・デュボワは写真単体ではなく写真アルバムそのものに「日本の美」を見出していたのではないだろうかと考えるに至った。

訪日外国人向けの土産用写真アルバムの全盛期は 1900 年前後の約 20 年間(明治 20 年代から 30 年代）であった。すでに明治期に入って久しい時期であったが、それらの写真は江戸の雰囲気を色濃く残す演出写真で構成される傾向にあった。それこそが日本を訪れる外国人がお土産として求める売れる写真だったからである。そのような目的で制作された写真アルバムは、時を経ても、なお、外国人が想像する「美しい日本」を写真、装飾、装丁といった全ての要素を用いて閉じ込めたものであったのではないだろうか。ジョゼフ・デュボワは、その「美しい日本」を自分の手のうちに収めることができる「アルバム」という形状、そして写真に魅力を感じて収集していたのではないかと推察する。

この推察を調査目的へと回帰する。ジョゼフ・デュボワのコレクション傾向を探ることで、本来の調査目的である「日本の初期写真がヨーロッパでどのように受け止められてきたか」については、ヨーロッパにおいては単一の写真に対して芸術作品としての価値が見出される場合もあるが、一方で、写真アルバムという装丁などの工芸的要素を含む全体に対する価値の見出され方もあるという可能性を得るに至った。

写真アルバム全体を評価基準とする見方は、撮影者や被写体の著名性以外での写真評価という新たな基準を生み出すきっかけになる可能性もあるのではないだろうか。訪日外国人向けの土産用写真アルバムは、一人の撮影者が撮影した写真だけで構成され

〔７　研究結果・成果（つづき）〕

る場合もあるが、複数の撮影者が撮影した写真で構成されていることが多い。そのような理由もあり、アルバムを販売していた写真館、もしくは写真アルバムごとに評価することになる。写真アルバムの総合的な評価にフォーカスすることは、写真家だけでなく、写真販売店に目を向けることにもなる。それは写真を取り巻く世界が原初から写真を撮影した人物だけでなく、それを仕上げる役割を担った人物やアルバムの生産者・販売者らの存在があって初めて成り立っていたことを改めて示し、再評価することにもつながる。これは写真史構築において、写真家だけでなく、それを取り巻く社会構造に対しても調査と理解が必要であることを示すものである。

コレクションを活用した今後の発展と可能性としては、デュボア・コレクションと『THE FAR EAST』(1870 年から 5 年間日本で発行された英字新聞。570 点以上の写真を掲載）の写真を比較し、傾向を分析することも検討してみたい。訪日外国人向けに制作された土産用写真アルバムを中心としたデュボワコレクションと在日外国人向けの新聞に貼り付けられた写真群である『THE FAR EAST』掲載写真群の比較は、一括りにされがちな「幕末明治の日本初期写真」という括りを、制作用途ごとに分類し、その傾向を明らかにできる可能性があるためである。お土産のために演出された幕末明治の日本と、情報伝達を目的とした日本の写真を比較分類することで、真に幕末明治の日本とはどのような風景であったのかを考察する試みは、本研究全体の研究目的の一つである世界的な価値基準における日本初期写真の再評価に関する考察にもつながると考えている。

HikarIA プロジェクトに参加するかたちで日本の初期写真について調査することは、より柔軟な思考を与えてくれる経験であった。AI に関する理解や、これまで無意識もしくは感覚的に認知し、判断してきたことを明確に言語化することの難しさと重要性について考える機会であった。プロジェクトの代表者であるエドワール・デサントゥールとクリストファー・ケルモーバンとの議論からは、異なるプロフェッショナルが混じり合いアイデアを出し合うことの必要性と、あらゆる可能性に対して柔軟な思考をもつことと常に開かれた精神状態であることの重要性も学ぶことができた。

以　　上